



Title	讃岐地域における東播系須恵器鉢の流通
Author(s)	谷本, 峻也
Citation	待兼山考古学論集. 2025, 4, p. 727-736
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105084
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

讃岐地域における東播系須恵器鉢の流通

谷 本 峻 也

はじめに

鉢の集中生産と西日本への広域流通を達成した東播系須恵器が、特定器種の集中生産と製品の広域流通を条件とする中世窯業の成立を語るうえで重要な位置を占めることは言うまでもない。本稿では、中世窯業成立期における広域流通の実態解明に向けて、讃岐地域における東播系須恵器鉢の流通を対象に基礎的な検討を加える。

1. 研究史と本論の射程

東播系須恵器鉢が西日本を中心に広く分布することは早くから認識されており、各地域における年代決定の指標として重視されたため、編年研究がいち早く進んだ（山本 1976、森田 1995 など）。一方、流通面では広域流通に至る生産体制の変化について検討したものが多い（吉岡 1987 など）。

しかし、全国的な東播系須恵器鉢の集成が行われ（中世土器研究会事務局 2015）、12 世紀後半に四国北岸地域や北部九州を中心に流通品として広域流通することや、13 世紀後半以降は播磨とその近隣国を中心とした流通に変化することが明らかとなった（佐藤 2016・2022）。

また、佐藤 2016 は東播系須恵器鉢の具体的な流通を検討するうえで讃岐地域を重視しており、高松城跡下層で和泉型瓦器碗が集中するのに対し、東播系須恵器鉢は少量しか出土しないことから、和泉型瓦器碗とは異なる搬送ルートを想定し、貢納品として集積されたものを再分配するのではなく、播磨から直接出荷されたと理解する（佐藤 2022）。

このように、近年の研究成果では、東播系須恵器鉢の広域流通に関する基礎的なデータが集成され、その実態が判明しつつある。そのなかで讃岐地域も重要な位置を占めているが、やや問題が残る。それは、讃岐地域での東播系須恵器鉢の出現時期や分布の実態が不明瞭という点である。日本中世土器研究会の全国集成の結果、讃岐地域での東播系須恵器鉢の出土点数はわずか 15 点であり、搬入開始時期が早まる可能性を指摘しつつも、主たる搬入期を 13 世紀以降とした（藤本・島田 2015）。また、佐藤 2016 が提示したデータも阿讃地域として示されており、讃岐地域の具体的な出土数の変化も不明である（佐藤 2016）。一方、佐藤 2022 による

と、東播系須恵器鉢は 12 世紀には讃岐地域で存在が確認され、一定数の出土量をもつ（佐藤 竜 2000・2016a）。

以上のように、東播系須恵器鉢の広域流通はその一端が明らかにされつつあるが、讃岐地域では出現時期や出土数や分布の推移など不明な部分が残る。また、佐藤重聖が示した「広域流通」が各地域でどのような流通構造を有していたか具体的な検証を行う必要もある。よって、本稿では基礎的なデータを提示し、讃岐地域における東播系須恵器鉢の分布の変化を追いながら、その流通のあり方について検討する。

2. 讃岐地域における東播系須恵器鉢の出土数の推移

ここでは讃岐地域における東播系須恵器鉢の出土数の推移について検討する。資料の集成にあたっては、報告書に掲載され、時期決定の指標となる口縁部が残存するものを対象とした。なお、以下の東播系須恵器鉢の年代観は日本中世土器研究会による編年（中世土器研究会事務局 2015）にもとづく。

今回の集成では、84 遺跡 378 点が対象となった（図 1）。讃岐地域における最古の東播系須恵器鉢は讃岐国府跡から出土したもの（松本編 2019）で、11 世紀後葉に位置づけられる。11 世紀後葉から 12 世紀初頭にかけて、東播系須恵器鉢の出土量は限定的であるものの、12 世紀前半に出土数が微増し、12 世紀後半には遺跡数・出土数が爆発的に増加する。13 世紀前半に

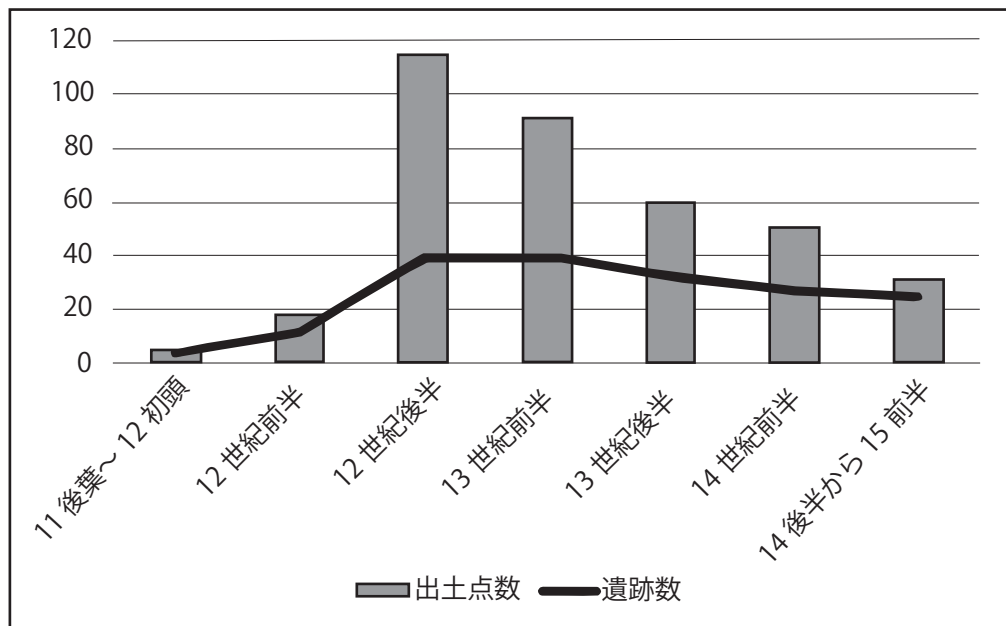


図 1 讃岐地域における東播系須恵器鉢の出土数と遺跡数の推移

は出土数が減少するも、出土遺跡数は変わらない。しかし、13 世紀後半になると、遺跡数・出土数ともに減少し、14 世紀後半から 15 世紀前半を最後に東播系須恵器鉢の搬入は終了したと考えられる。

このように、讃岐地域における東播系須恵器鉢の出土数の推移は、京都・奈良を除く地域において、12 世紀後半に出土量がピークとなり、13 世紀前半以降は減少していくという事象と合致する（佐藤重 2016）。一方、出土遺跡数の面では、13 世紀前半に減少傾向はみられず、ほぼ同数を維持しており、面的分布の観点からは搬入のピークが維持されたと考えられる。

3. 讃岐地域における東播系須恵器鉢の分布の変遷

本項では、11 世紀後半から 15 世紀前半における東播系須恵器鉢の分布の変化から、その特徴について検討する（図 2～8）。

11 世紀後半から 12 世紀初頭 搬入される遺跡は限定されており、讃岐国府跡（坂出市）や、生産遺跡を近傍に控える県道西村遺跡（綾川町）、港湾施設が確認された高松城跡下層（高松市）などで出土している。このうち、讃岐国府跡の 2 点が最多であり、官的遺跡や河川・海上交通の結節点などにごく少量みられるのみである。

12 世紀前半 この時期になると、讃岐国府跡や交通の結節点以外に、高松平野や丸亀平野を中心としてほぼ全域に少量搬入されていることが分かる。ただし、集落遺跡では西打遺跡や空港跡地遺跡（高松市）といった拠点的な集落での出土量が多く、一般的な集落ではほぼ出土しない。

12 世紀後半 島嶼部や港湾、河川沿いに集中しており、とくに高松平野の古高松湾や本津川

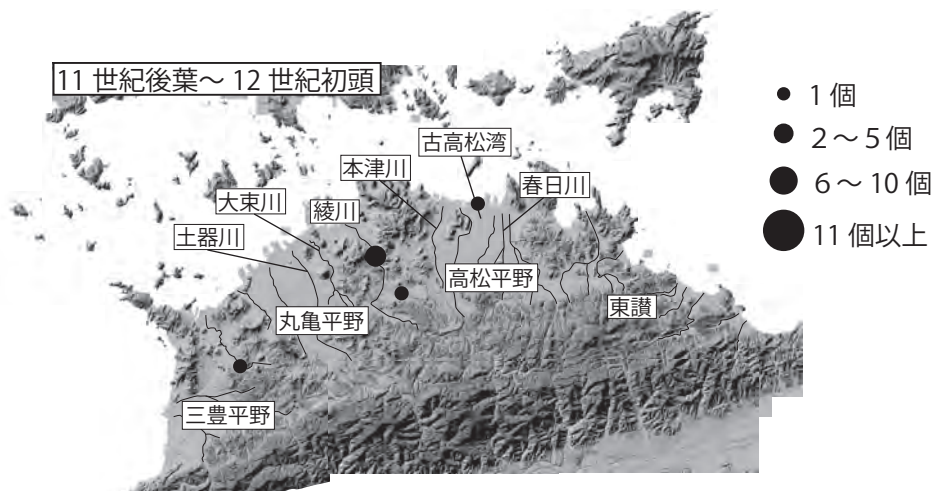


図 2 11 世紀後半から 12 世紀初頭にかけての分布

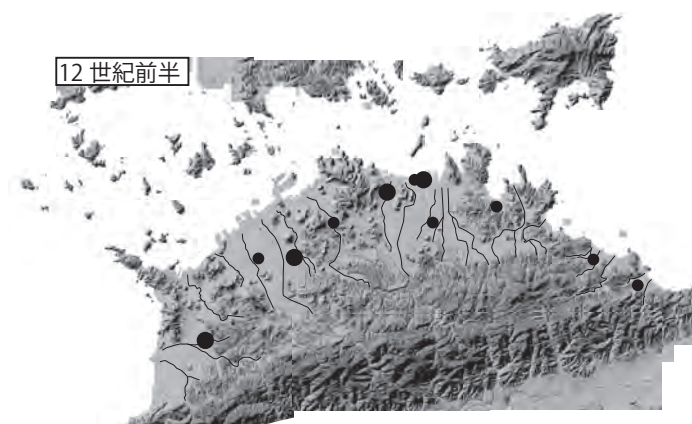


図3 12世紀前半における分布

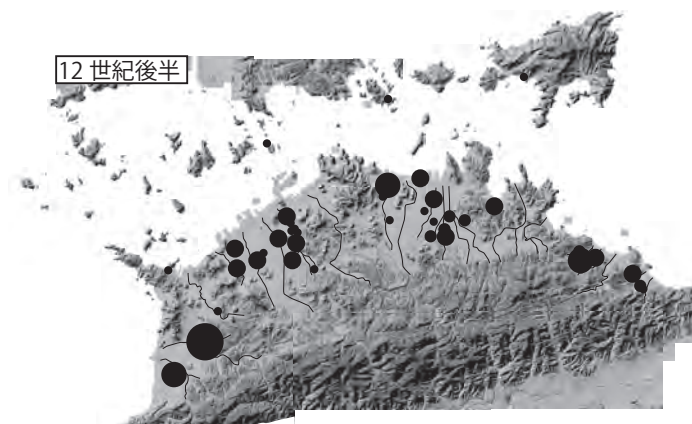


図4 12世紀後半における分布

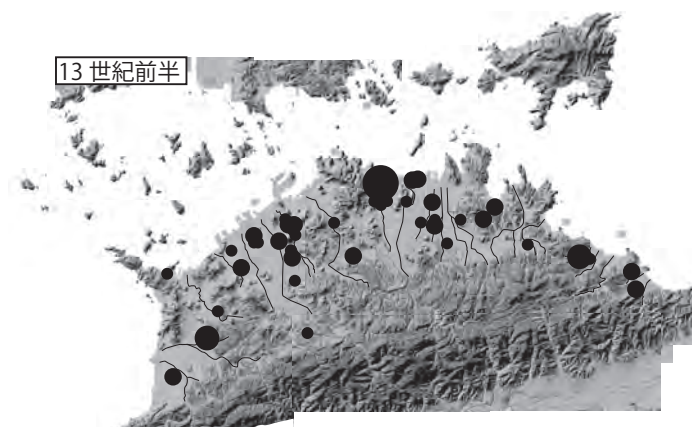


図5 13世紀前半における分布

流域、春日川流域などに加え、丸亀平野の大東川流域に濃厚な分布をみせる。

最大の特徴は、港湾施設や拠点集落はもとより、一般的な集落遺跡からも出土することである。ただし、西打遺跡や延命遺跡のように、一部の拠点集落に東播系須恵器鉢が多く出土する例もあり、その高い求心力は否定できない。

13世紀前半 12世紀後半に引き続き、高松平野と丸亀平野が分布の中心となりつつ、三豊平野や東讃地域でも出土量が維持される。出土点数こそ減少しているが、面的分布の観点では、12世紀後半に引き続きピークにあると考えられる。

13世紀後半 高松平野は分布域を維持するものの、丸亀平野では土器川や大東川の下流域が分布の中心となる。一方、三豊平野や東讃地域も分布域は維持するが、とくに三豊平野での搬入量は急激に減少する。

14世紀前半 全体的な傾向は13世紀後半とほぼ同様であるが、東讃地域でも出土量が減少し、高松平野と丸亀平

野への集中傾向がより顕著となる。

14 世紀後半から 15 世紀前半高松平野では臨海部の出土量こそ減少するが、春日川流域は出土量を維持し、丸亀平野も同様の様相をみせる。三豊平野・東讃地域はとにもごく少量しか出土しない。

小 結 分布上では高松平野と丸亀平野が主な消費地であったことが分かる。11 世紀後半から 12 世紀前半にかけては、讃岐国府や拠点集落、海上・水上交通の結節点を中心に分布する。一方、12 世紀後半になると、一般的な集落遺跡でも多く出土するようになり、13 世紀前半まで讃岐地域全体への大量・面的搬入が続く。13 世紀後半以降、三豊平野と東讃地域で出

土量が急激に減少し、三豊平野では 13 世紀後半に、東讃地域では 14 世紀前半に大量搬入を終える。一方、高松平野と丸亀平野では最後まで大量搬入が維持される。

4. 讃岐地域における東播系須恵器鉢の流通

前項までの検討によって、讃岐地域における東播系須恵器鉢の分布に大きく 3 つの段階を想定することができる。

1 つ目の段階は 11 世紀後半から 12 世紀前半で、讃岐国府や拠点集落、流通の結節点など限られた遺跡に分布する。2 つ目の段階は、12 世紀後半から 13 世紀前半で、東播系須恵器鉢の搬入がピークとなり、讃岐地域全体に大量かつ面的に搬入され、一般的な集落遺跡からの出土数も急増する。3 つ目の段階は、13 世紀後半から 15 世紀前半で、三豊平野・東讃地域での

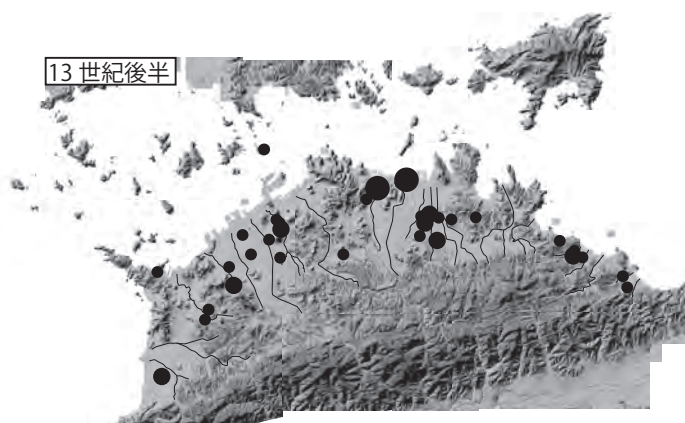


図 6 13 世紀後半における分布

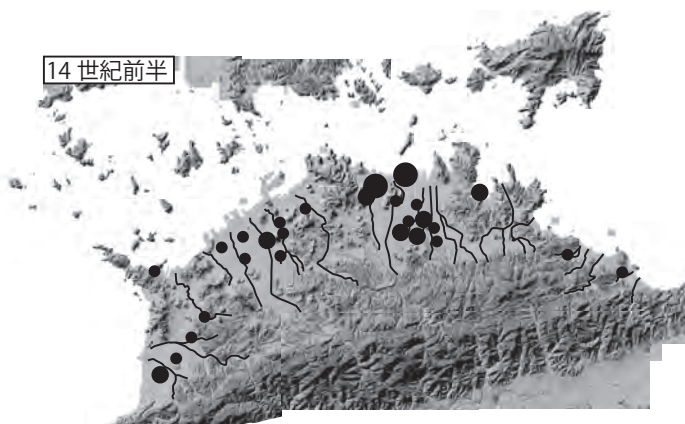


図 7 14 世紀前半における分布

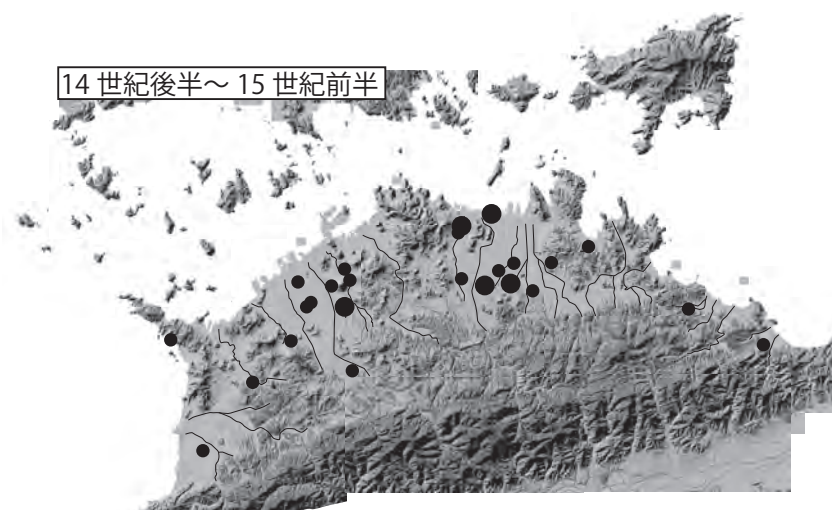


図8 14 世紀後半から 15 世紀前半の分布

出土量が減少し、高松平野と丸亀平野に分布が集中する段階である。

しかし、これらはあくまで分布の変遷であり、東播系須恵器鉢の流通を検討するためには、遺跡の性格や立地関係も含めた多角的な視点が必要であることは言うまでもない。本項では、上記で設定した諸段階における流通について検討する。なお、以下における「流通」とは、市場原理にもとづき、生産地から商業者を介して不特定多数の消費者（需要）へ生産物（商品）が行き届くシステムを指す。

第1段階 この段階の特徴は流通拠点に関係する遺跡や讃岐国府跡に加え、西打遺跡や空港跡地遺跡のような限られた拠点の集落に搬入される。つまり、第1段階では東播系須恵器鉢は経済的求心力の高い特定の遺跡における限定的な需要にもとづいて搬入されたと想定される⁽¹⁾。

第2段階 ほぼすべての出土遺跡が臨海部あるいは河川沿いに存在しており、河川を用いながら内陸部へ搬入されたと考えられる。

臨海部に目を向けると、高松城跡下層では、荷揚げ場と考えられる礫敷遺構が検出されており（佐藤竜編 2003）、当時の港湾施設の一端を示す。このような自然地形を用いた港湾施設は瀬戸内地域全体で確認されており（佐藤竜 2016b）、讃岐地域内にも多く存在したと推測される⁽²⁾。

また、島嶼部からの出土事例が示すように、瀬戸内海航路からもたらされた東播系須恵器鉢は各地域の臨海部や河口部に設けられた港湾施設で荷揚げされたと考えられる。積浦遺跡や羽佐島遺跡（坂出市）からの出土例を踏まえると、高松平野は児島—直島群島（積浦遺跡）—野原（古高松湾）、丸亀平野は児島—塩飽諸島—丸亀平野河口部の搬入ルートが想定されよう。ただし、高松平野では春日川流域に分布が集中するため、春日川河口部周辺が荷揚げの中心だったと推測される。そして、そこから河川を伝い、時には陸路も用いながら内陸部へと搬入され、

各遺跡の周辺で開かれていたと想定される市場で売買されたと考えられる。

さて、ここで問題となるのが特定の拠点集落に東播系須恵器鉢が集中することである。他の搬入土器では、12～13世紀前半に讃岐国府跡に白磁の出土が集中しており、余剰品として国府経営層による経済活動に用いられたと推測されている（佐藤竜 2016c）。この事例を踏まえれば、特定の拠点集落に東播系須恵器鉢が一度集積され、そこから各遺跡へと流通している可能性がある。

しかし、拠点集落で出土した東播系須恵器鉢の大部分は破片で、器面が摩滅しており、使用痕跡が認められる。このことは高松平野における和泉型瓦器碗の破損品を未使用のまま廃棄し、実用に耐えるものを搬出する流通中継点／交易品としてのあり方（松本 2009a）とは対照的である。

また、讃岐国府跡での輸入陶磁の出土密度は $0.349 \text{ 点} / \text{m}^2 \cdot 2.87 \text{ m}^2 / \text{点}$ である。それに対し、当段階で最大の東播系須恵器鉢の出土量を誇る延命遺跡（三豊市：12世紀後半）では $0.001 \text{ 点} / \text{m}^2 \cdot 782.6 \text{ m}^2 / \text{点}$ 、西内遺跡（13世紀前半）で $0.0005 \text{ 点} / \text{m}^2 \cdot 2146.9 \text{ m}^2 / \text{点}$ にすぎない。土器の性格や調査面積、出土個数によるものの、これらは一般的な集落遺跡からの出土頻度と比較しても際立った数値ではないため、余剰を生むほどの集中傾向はみられず、日用品としての保有・消費に留まったとみてよい。

上記をまとめると、出土点数の面では特定集落への集中傾向はみられるが、それは高い経済的求心力によるもので、余剰品／交易品としての保有はなく、日用品として消費されたと考えられる。そして、出土密度の面では一般的な集落遺跡と大差はないため、第2段階における讃岐地域への東播系須恵器鉢の大量かつ面的搬入は、荷揚げされたものを特定の拠点集落に一度集積し、そこを貴店い流通していくのではなく、各地域の港湾を起点として、河川伝いに内陸部の各消費地へ均質的に搬入される、商品としての流通を示すものと結論づけられる。

第3段階 この段階には高松平野と丸亀平野に分布が集中し、流通構造に変化はみられない。ただし、浜ノ町遺跡（高松市）に出土点数が集中し始めることは示唆的といえる。浜ノ町遺跡は13世紀末に港湾施設と集落が一体化した「港町」として形成され、流通の一大拠点として成長していく（乗松編 2004、市村 2016）。また、大東川流域でも13世紀中頃から河口域の宇多津で活発な経済活動が始まることが指摘されている（佐藤竜 2016b）。これらの地域で東播系須恵器鉢の流通量が維持された背景のひとつに、港町の出現が想定される。

ただし、このことは高松・丸亀平野で搬入量が維持された理由のひとつになっても、東讃・西讃地域で搬入量が激減していく理由にはならない。これらの地域にも港町が存在したことは『兵庫北関入船納帖』にも記載されている。上記の現象を理解するためには、当段階における在地産土器との関係を踏まえた検討も必要であるが、現状では明確な背景を述べることはできず、今後の課題としたい。

おわりに

以上、讃岐地域における東播系須恵器鉢の流通について検討した。最大の画期となる第2段階では、不特定多数の遺跡を対象とした大量・面的流通を確認できた。これは大規模な商品的流通といって過言ではなく、今日につながる流通システムの萌芽ともいえよう^③。

また、12世紀後半には「銭の病」(『百鍊抄』)と称されるように、中国大陆から大量の銭貨が流入し、従来の物々交換にもとづく流通システムではなく、貨幣を媒介とする流通システム(貨幣経済)が急速に浸透し、平安京や大宰府の二大都市以外にも、さまざまな地域で経済が発展していった。

一方、生産地の動向をみると、12世紀前半には神出窯における瓦生産が急速に減少し、鉢の大量生産が始まっており(森内2015)、このことが第1段階における全国的な出土量の増加につながったと考えられる。12世紀後半になると、京都における大規模造営事業が下火となり、東播系須恵器窯全体で瓦生産が低調となり、鉢と甕の生産志向が高まる。そして、瀬戸内海に直面する魚住窯でも鉢生産が本格化したことで、鉢の大量生産だけでなく、大量供給も可能となった。第2段階における大規模な商品的流通は、これらの要因が複合的に重なったことで可能となったと考えられる。

また、当該期には和泉型瓦器碗や十瓶山窯産須恵器甕のように、広域に分布する土器が存在している。ただし、和泉型瓦器碗は貢納品輸送の帰り荷として持ち込まれたものが流通したと推測され(佐藤重2016)、十瓶山窯産須恵器甕は平安京と北部九州を中心とする地域で経筒外容器として用いられており(荻野1993、佐藤竜2016c)、その背景は多様である。

なお、第2段階において、拠点集落でも空港跡地遺跡などでは東播系須恵器鉢の出土量が少ないことは注目に値する。このことは綾川流域にも指摘でき、讃岐国府跡に至っては第2段階以降、1点のみの出土である。これらには綾川流域に属する十瓶山窯産の鉢が大量に出土するという共通点があり、とくに綾川流域の様相は十瓶山窯産鉢の流通に強く制限されたと考えられる。今後、十瓶山窯産鉢も含めた総合的な流通構造を検討していく必要がある。

謝 辞

福永伸哉先生には在学中、言葉には表せられないほどの学恩を賜りました。学部1回生の頃、日本史学専修の選抜試験で落第し、その後も部活動のみに邁進していたにもかかわらず、大学院修了の日まで懇切丁寧にご指導いただきました。先生より賜りました学恩を少しでもお返しできるよう、よりいっそう日々の業務・研究活動に勤しんで参ります。末尾ではございますが、福永先生の今後ますますのご健康とご多幸をお祈りしております。

註

- (1) 12世紀前半は、12世紀後半ほどではないにせよ、出土数・遺跡数とも増加し、讃岐地域全体に搬入されている点は注目される。森内秀造は12世紀前半の神出窯が鉢と瓦を主体とする生産に転換したと指摘しており（森内2015）、生産地における鉢生産への集中傾向がこの段階における搬入量の増加を支えたと考えられる。
- (2) 讃岐地域では、積浦遺跡（直島町）や浜ノ町遺跡（高松市）でも礫敷遺構が検出されており、伊勢町遺跡（宇多津町）でもその存在が指摘されている（松本2009b）。
- (3) これらのうち、十瓶山窯産甕は特定の需要に対する広域流通に位置づけられ、古代における篠窯産鉢も対象となる。一方、東播系須恵器鉢は不特定多数の需要に対する広域流通と捉えられる。平安京と大宰府に分布域が集中する前者と、流通圏の問題も孕むが、平安京と大宰府周辺さえも1つの消費地として均質的に流通する後者との流通構造の違いを把握することが中世窯業成立期における広域流通の実態を解明するうえで必要となる。

引用・参考文献

- 市村高男 2016「中世港町の成立と展開—中世都市論の一環として—」『港町の原像（下）中世港町論の射程』岩田書院、東京：pp. 7-52
- 荻野繁春 1993「中世西日本における国産貯蔵器の分布」『福井考古学会会誌』第11号 福井考古学会、福井：pp. 45-94
- 佐藤亜聖 2016「東播系須恵器編年研究の現状」『土器編年研究の現在と各時代の特質—須恵器生産の成立から終焉まで—』考古学研究会関西例会、大阪：pp. 101-119
- 佐藤亜聖 2022「東播系須恵器」『新版 概説 中世の土器・陶磁器』真陽社、京都：pp. 219-230
- 佐藤竜馬 1993「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」『考古学論叢』関西大学考古学研究室開設四拾周年記念 関西大学考古学研究室、大阪：pp. 775-810
- 佐藤竜馬 2000「第5章 まとめ 第1節 高松平野と周辺地域における中世土器の編年」『空港跡地遺跡Ⅳ』空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第4冊 香川県教育委員会、香川：pp. 405-468
- 佐藤竜馬（編）2003『高松城跡 西の丸町地区Ⅱ』サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告第4冊 香川県教育委員会、香川
- 佐藤竜馬 2016a「讃岐における古代～中世土器編年をめぐる基礎作業（1） 9世紀後葉～11世紀前葉の供膳器種」『香川県埋蔵文化財センター年報 平成26年度』香川県埋蔵文化財センター、香川：pp. 41-92
- 佐藤竜馬 2016b「前近代の港湾施設」『港町の原像（下）中世港町論の射程』岩田書院、東京：pp. 95-146
- 佐藤竜馬 2016c「第4章 総括 第3節 古代末期の讃岐国府」『讃岐国府跡1』香川県教育委員会、香川：pp. 96-102
- 中世土器研究会事務局 2015「東播系須恵器鉢の分類と編年」『中近世土器の基礎研究』26 東播系

- 須恵器—編年と分布から考える— 日本中世土器研究会、奈良：pp. 139-151
- 乗松真也（編） 2004『浜ノ町遺跡』サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告第6冊
香川県教育委員会、香川
- 藤本清志・島田豊彰 2015「四国出土の東播系須恵器鉢」『中近世土器の基礎研究』26 東播系須恵
器—編年と分布から考える— 日本中世土器研究会、奈良：pp. 139-151
- 松本和彦 2009a「野原の景観と地域構造」『港町の原像（上）中世讃岐と瀬戸内世界』岩田書院、東
京：pp. 11-46
- 松本和彦 2009b「中世宇多津・平山の景観」『港町の原像（上）中世讃岐と瀬戸内世界』岩田書院、東京：
pp. 175-198
- 松本和彦（編） 2019『讃岐国府跡2』香川県教育委員会、香川
- 森内秀造 2015「神出窯須恵器の生産地編年の再検討にむけて」『中近世土器の基礎研究』26 東播
系須恵器—編年と分布から考える— 日本中世土器研究会、奈良：pp. 35-48
- 森田 稔 1995「中世須恵器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社、京都：pp. 356-366
- 山本三郎 1976「Ⅱ 安富中学校東遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書（宍粟
編）』兵庫県教育委員会、兵庫：pp. Ⅱ - 1-96
- 吉岡康暢 1987「東播系窯と珠洲系窯—須恵器系中世窯の成立をめぐる—」『考古学ジャーナル』
280 ニュー・サイエンス社、東京